

あきらめるにも

あきらめられない

東日本大震災から3ヶ月が経って

二〇一一年六月十一日

里山研究庵Nomad

小貫雅男

伊藤恵子

東北の

まだ寒さ厳しい

早春の昏下がり

三陸の海辺の町々を襲った

巨大津波

無表情なまでに

無慈悲に

無頓着なまでに

悠々と

死者の無念の思いを

容赦なく呑み込み

すべてを

跡形もなく

押し流していった

フクシマ原発は

最悪の事態に陥り

テレビで繰り返し返される

専門家の解説とは裏腹に

すでに早々と

メルトダウンを起こしていた

目に見えぬ

放射性物質は

風に乗って飛散し

雪や雨とともに地に降り

人々の身体を
ふるさとの山河を
母なる海を
人間の精神を
深く深く
蝕んでいった

一瞬のうちに襲った
不安と恐怖の
底知れぬ
深い闇に
すべてが沈んでいった

二〇一一年三月十一日
一四時四六分
そこには歴史をくつきり分ける
確かな境があつた

あれから三ヵ月
強烈な記憶は
しだいに薄れ
人々が
また元の意識に戻ると
政治家や財界、官僚や御用学者・・・からは
「より安全な原発」をめざすという声が
早や聞こえてくる

「より安全な原発」なんて
本当にあるのか
いったん事故を起こしたら
計り知れなく甚大な
取り返しのつかない
被害を及ぼす

原発の安全とは
幻想に過ぎないのではないのか
このことをフクシマ原発事故が
ついこの間、日本中を震撼させた恐怖と
ふるさとを追われた人々の
今なお続く深い悲しみや苦しみを通して
教えてくれているはずだ

それでも
「日本の原発は安全です」
「電力が不足します」などと繰り返し

またもや札束で
地域住民をだますのであろうか

ビッグバンによる

宇宙誕生から一三七億年

広がりゆく無窮の宇宙に

地球が生まれてから四六億年

この地球の太古の海に

原初の生命があらわれてから三八億年

気の遠くなるような歳月をかけ

大自然界が多様ないのちをはぐくみ育て

連綿と続く生命の進化の果てに

最古の人類があらわれてから三〇〇万年

この宇宙の

悠久の歴史の深奥にあつて

物質世界と生命世界の

生成・進化のあらゆる現象を貫く

もつとも普遍的な

「適応・調整」(自己組織化)の原理

この自然の摂理に

ただただ畏敬の念を抱かざるをえない

原発は

この大自然界を貫く摂理に背き

世界でもつとも単純で

もつとも美しいと言われている

アインシュタインの数式

$E = mc^2$ (エネルギーE、質量m、光速c)どおりに

きわめて人為的に

自然から

途方もなく巨大な核エネルギーを引き出し

実用化に成功したかのように見えた

しかし

この「夢のエネルギー」は

それに伴って

これまた想像を絶する

大量の放射性物質を発生させる

さらには

危険きわまりない使用済み核燃料は

最終処理の行き先すらまだ決まっていない

反自然的この異物を

自然界に再度人為的に戻すことは

これまた自然の摂理に背く行為なのだ

計り知れなく高密度
かつ巨大なエネルギーを
人為によって

局所的につくり出すこと
これ自体がもともと自然界に背いた
犯罪的行為ではないのか

呪われ産み落とされた

恐るべき反自然的異端のこの怪物を

人智によって閉じ込め

制御し、抑制するには

引き出された巨大なエネルギーに見合う

あまりにも大きな代償が必要とされる

得体の知れないこの怪物を閉じ込め

制御し、抑制する機械・装置システムそのものが

果てしなく複雑かつ巨大化していかがるをえない

予測つかぬ外的要因に触発され

偶発する原発事故の原因すべてを

あらかじめ人智によって想定すること

それ自体に限界がある

完全な形で安全性を求めること自体が

どだい無理なのだ

原発がひとたび事故を起こした時

その被害は

これまでのいかなる機械・装置とも比べようもなく
はるかに甚大になる

人間社会を破局に至らしめる

最悪のリスクを伴う原発が

安全であるとする考え方そのものが

この超巨大エネルギー

この巨大システムの本質上

成立しないのである

放射性物質が

一旦ばらまかれたら

被害の大きさは

空間的にも時間的にも、そして社会的にも

計算不可能な無限大になってしまっ

したがって起きる確率が

どれだけ小さくても

ゼロでない限り

リスクは無限大になる

原発推進者ですら
原発の事故が

ゼロであるとは断言できない

だから、原発の立地を

人口過密の大都市を避け

海辺の過疎の農村に

押しつけるのではないのか

この点で原発は

他産業の事故とは

本質的にまったく違う

フクシマから

身をもって学んだことは

事故が起きたら

その被害は無限大であるから

起きる確率が

どんなに小さくても

ゼロであると断言できない限り

やってはならないということなのである

原子力ビジネスの

国際競争が激化する中

核燃料の原料ウラン鉱の開発によって

大地を荒らされ

核廃棄物の貯蔵・最終処分を押しつけられる

モンゴルのような

「世界の辺境」の人々を思えば

なおさらだ

3・11のこの恐るべき事態におよんでも

「日本の原発は安全です」と

原子力工学の専門家をはじめ

評論家や御用学者

財界や政治家や官僚が

なおも強弁するとなれば

それは

現世のちっぽけな私利私欲に惑わされ

わずかな良心をもかなくなり捨て

まさに非科学的な見解に立った

恥ずべき犯罪的行為と言わざるを得ない

それは

国民大多数のいのちに背を向けた

「原子カムラ」のエゴの論理に過ぎない

今は亡きロッカー

いまのきよしろう

忌野清志郎（二〇〇九年五月二日死去、享年58）は

2011・3・11 フクシマ

この恐るべき事態を

知っていたかのように

サマータイム・ブルース（一九八八年発表）の中で

「それでもテレビは言っている

「日本の原発は安全です」

と哀調さえ帯びた

戲謔的なフレーズを繰り返し

ずつとずつと前から

原発推進に

果敢に警鐘を鳴らし続けた

清志郎がこの世を去ったまさに今

多くの若者は

このロッカーが貫いた勇氣ある行動に

共感と尊敬の思いを寄せている

大震災から二ヵ月後

忌野清志郎の三回忌にあたる五月二日

東京・日本武道館で開催されたスペシャルライブに

黒柳徹子はビデオメッセージを寄せ

「あなたが二〇年以上前から

「原発の歌で

真剣に訴えていたことの重大さを

私たちは分かっていますでした」

と涙ぐんでいた

サマータイム・ブルースが歌われると

一万二〇〇〇人超満員の観客は総立ちになったという

不条理にも突如、襲いかかり

今も続くこの逆境の中

それでも人は

ぐつとぐつと

生きよつとする

人間を取り戻し

家族の再生を

地域の復旧と復興を願ひ

深い闇に差し込む

微かな光に

一縷の望みをかけ

懸命に生きよつとする

このささやかな祈りにも似た思いに
立ちほだかり
阻むものは
いったい何なのか
その正体が
ようやく見えはじめてくる

人間の本性に深く根ざした
何ともしようのない
市場メカニズムによって
欲望を拡大し
自己増殖を際限なく繰り返しながら
肥大化していく
この無気味な妖怪

影をひそめたのも束の間

人間自身の欲望によって築きあげられた
この巨大な自己増殖のシステムは
いよいよ世界に君臨し
正体もあらわに魔物の如く
地上をわが物顔に徘徊し
ついには人間自身をも
ことごとく虜にする

何と悲しいことか
人間は自らが築いた
この巨大なシステムから
そして人間の業から
容易に逃れられない

「省エネ」とか
「低炭素社会」とか
これまでのように
「エコ」「エコ」と騒ぎ立て
科学・技術にのみ
どんなに力を傾注しても
それはまったくの片手落ちである

欲望の自己増殖を際限なく続ける
浪費が美德の
市場競争至上主義
アメリカ型「拡大経済」を
根源から問い直すことなく
そのまま放置しておく限り

結局、そのもとは
科学技術は人間の欲望の増幅に
与^{くみ}するだけで

市場競争はいよいよ
世界規模で熾烈を極めていく

今までよりもっともっと大がかりに
人間精神の類廃

自然破壊

社会破局の

恐るべきスパイラルへと

拍車がかけてられていくにちがいない

時間が経ち

人々の記憶が

忘却の彼方へと

薄れていくのを見計らい

またもや

「日本の原発は安全です」と
のたまいながら

今度は

もっともつとずる賢く

「成長戦略のためには

自然エネルギーも増やします

電力の安定供給には

原発も必要です

みなさん、節電も大切です

さもなければ、大規模停電が起きます

日本の経済は停滞します

国際競争にも負けます

雇用も悪化します・・・」

と並べ立て

なし崩しにズルズルと

原発を国民に押しつけていくのであろうか

これまでに幾度となく

繰り返されてきた

その場凌ぎの優柔不断が

今度こそは

取り返しのつかない

恐るべき事態に

すべての国民を

世界の人々を

巻き添えにしていく

3・11の逆境の中
不安と恐怖の

底知れぬ深い闇の中に
ついに見たものは

人間の持つもう一つの本性
つまり

心優しい
いたわりの

分かちあいの
精神ではなかったのか

もう一度でいい

あきらめず

今度こそはと

多くの人々は

自分自身をしっかりと見つめなおし

子や孫の未来に思いを馳せ

希望の明日を見出したいと願っている

だから人は

じつところえ

今日を生きようとするのだ

人間の幸せとは

いったい何だったのか

3・11 東日本大震災の

あのどん底の中

助けあい

懸命に生きる人々の姿

被災地から遠く離れた

都市や農山村でも

人々の価値観は

大きく変わるつとしている

3・11は時代を画する

分水嶺となり

それは

新しい時代への転換を決定づける

大きなうねりとなって

やがて時代を変えていくにちがいない

時代の流れに取り残され

変わらぬものは

永田町の「政治ムラ」ではないのか

どれもこれも旧態依然たる
似たり寄ったりの政策を競い
「政治ムラ」のちっぼけなコップの中で
拳げ足取りに終始している

ことあるごとに
「被災地のため、国家国民のため」
と呪文を繰り返しながら
私利私欲に駆られ
国民そっこのけで
権力抗争に明け暮れている

どいつもこいつも…と言えば
失礼な言い方かもしれない
また、不正確になるのかもしれない
しかし、与野党を問わず
ほとんどの国会議員が
こんな体たらくを繰り返している

国民は
被災地不在の、国民不在の
この醜態を
今度こそは
嫌というほど見せつけられた

いつかは
国民の総意によって
議会から
こっしたすべてを一掃し
新しい風を吹き込まない限り
どつにもならないところにまできている

多くの国民は
憤りを感じながら
このことを
じつに長きにわたる
自らの体験から考えはじめた

3・11以後
原発の
あまりにも大きなリスクに
多くの人々が気づいた今
一日たりとも猶予ならぬものは
エネルギー政策の根本的転換

そして何よりも
その土台となる
社会・経済のあり方
生産と暮らしのあり方そのものを
根源から変えていくことであるはずだ

長期展望に立つ
社会のあり方の

この主要な選択的テーマが
遅かれ早かれ、否応なしに
国民的議論の争点の
基軸にならざるをえないであろう

それは、究極において

一八世紀産業革命以来

母なる大地から引き離され

ついに根なし草同然に成り果てた

賃金労働者という

人間の存在形態によって

埋め尽くされてきた

資本主義社会の

生成・進化・衰退の

最後の歴史的段階ともいうべき

市場競争至上主義の

無慈悲なアメリカ型「拡大経済」社会に

今なお固執するのか

それとも

「菜園家族」型ワークシェアリングによって

ふたたび大地を取り戻した人々が

限りある資源を分かちあい

支えあい

ともに生きる

人間性豊かな

脱原発の

自然循環型共生社会へ

今こそ転換するのか

この二つの

いずれかの選択にならざるをえないであろう

被災地の真の復興構想も

今やこの議論をぬきにしては

考えられないはずだ

東日本大震災と
フクシマ原発事故という
この未曾有の危機に直面し
これほど大きな歴史的岐路に
立たされているにもかかわらず
この国の為政者たちの考えは
旧態依然として
本質的に変わらず
驚くほど安穩としている

3・11以後

国民の意識からは
いよいよかけ離れ
勝手気ままに振る舞う
その無神経さに愕然とする

永田町「政治ムラ」のコップの中の
些末な争点が
国民全体の争点であるかのように
すりかえられ
まさにこのすりかえられた
偽りの構図を
政・官・財・学、それにマスメディアが
一体となって
支えてきた歴史ではなかったのか

よく言われているような
衆参での与野党の議席数のねじれが
問題なのではない
本質的には
それは取るに足らない
小さな問題だ

もつともつと本質的で重大な問題
それはまさに
国民と議会との決定的な乖離であり
ねじれであり
それを偽りの構図にすりかえ
国民をあざむき
これを長きにわたって放置してきた
そのこと自体なのである
すりかえられた
この頑強な偽りの構図を
崩すことができるのは

議会内での
小手先の駆け引きなどではない

それは

長い道のりになるが

3・11後の

新たな分水嶺によって形成される

新しい理念

新しい思潮であり

森と海を結ぶ流域の広がり

つまり、人が働き暮らす身近な地域での

自然融和の

地道な地域づくりなのではないか

それを可能にし実現する

究極の力は

脱原発の

自然循環型共生社会という

21世紀の遠大な目標に向かって

共に歩み出す

人々のたゆまぬ営為である

それはほかでもない

無権利状態に放置され

不安定労働に悩み苦しみ

果てには使い捨てにされる

パートや派遣労働などのワーキングプア

成果主義のもと

過重労働とリストラの不安に晒され

心身を病む正社員たち

職業人生のスタートでつまずき

明日をも見出すことができず

絶望と孤独のうちにさ迷う若者たち

さらには

競争に勝ち残った強者だけが

大手を振ってまかり通る

非情の世界で

巨大化の波に呑まれ

もがき圧しつぶされていく

農林漁業者や

商・工の家族経営や

中小・零細企業者

そして

自然や家族や地域を失い
競争教育にかき立てられ
苦悩する子どもたちや親たち

福祉・年金・医療・介護など
庶民の最後の砦となるべき
社会保障制度が破綻する中
無縁社会の片隅で
孤立していく高齢者たち…

社会の不条理に苦しむ
これらすべての人々の
切なる願いによるものなのだ

いのち削り
心病む
終わりなき
市場競争に翻弄され

諦念と
反転への思いが
錯綜する
長い苦悶の中から
人々は
いよいよ覚醒の時代へと
動きはじめる

しかしこうした動きには
「人々を分断し、統治する」
を旨とする
得体の知れない
巨大なシステムが
立ちはだかり
多くは
雲散霧消の運命を辿る

それでも人々は
記憶の底に深く眠る
人類始原の
古き連帯の心を
呼び醒まし
いつの間にか
ズタズタに分断され
弱り果てた

自らの力を
人々の絆を
何とか取り戻そうとする

ゆっくりではあるが
力を合わせ
支えあい
希望の明日に向かって
歩みはじめるのだ

3・11

まさにここからはじまる
この新たな運動は
第二次世界大戦下の
フランスやイタリアで
人々が
小異を捨てて
大義のもとに結集した
あの勇気ある
反ファシズム統一戦線を
彷彿とさせる

それはまた
戦後日本の廃墟の中から
新しい明日を夢見て
村々や町々に芽生えた
子どもたちや大人たちの
のびやかな動きを
明るい姿を想い起こさせる
一大国民運動へと展開していく
大きな可能性を秘めている

歴史的とも言うべき
この与えられた可能性を
今、生かすことができずに
一体いつ

生かすことができるというのであろうか
今ではすっかり忘れられ
葬り去られた
世界史の記憶が
そしてかつての国民的体験の記憶が
行き詰まった

この時代の苦悩の中で
しだいに甦り

子どもたちや若者から
高齢者に至るまで
新たな形で世代を結び
今ようやく
ゆっくりではあるが
力強く動き出そうとしている

欲望で凝り固まり
怪物のように巨大化した
この不条理のシステムに
別れを告げ

母なる大地に抱かれた
人間らしい
おらかな暮らしをめざし
今こそゼロから
いのちの根源から
出直さなければならぬ

それは
人類始原の
自由・平等・友愛の
自然状態への回帰と止揚を
想起させるに足る
壮大な動きである

せせこましい
現代巨大工業社会の廃墟の中から
それ自身の否定によって
田園の牧歌的情景への回帰と
人間復活を夢見て

家族が共に
つつましく生きる
農ある暮らしと
繊細にして強靱な
素朴な精神世界を
取り戻すのである

それは
人々が支えあい
助けあい
共に生きる
心豊かな
分かちあいの社会

自然循環型共生の
おらかな世界に
生きることなのだ

3・11は

私たち人類に

進むべき道の選択を迫っている

この宇宙の無窮の時空の中

大自然界を貫く摂理に

背くことなく

あきらめないで

力強く歩めと

行くべき道を照らしている

すべては

ここからはじまる

未来への思いを

ゼロから一つひとつ積みあげ

築きあげ

流す汗から

流れる涙から

誠実な心から

希望の明日は見えてくる

それでもまだ

この世は

どうにもならないと

言うのであるつか

あきらめるのは

まだ早いような気がする

二〇一一年六月十一日

琵琶湖畔、鈴鹿山中、里山研究庵Nomadにて

小貫雅男

伊藤恵子

左記の文書と本をあわせてご一読いただければ幸いです。

印は、当方のホームページに公開中。まずは気軽にお読み下さい。

印は、公刊された本。さらに内容を深めたい方は、時間をかけてお読み下さい。

緊急提言「東日本大震災から希望の明日へ

大地に生きる人間復活の道は開かれている

」(小貫・伊藤、

里山研究庵Nomadホームページ掲載、PDFファイル、A4用紙三枚分、二〇一一年四月二六日)

「菜園家族宣言

静かなるレポリューション

」(小貫・伊藤、里山研究庵Nomadホームページ掲載、PDF

ファイル、A4用紙九二枚分、二〇一〇年十二月八日更新)

『菜園家族レポリューション』現代教養文庫(小貫、社会思想社、二〇七頁、二〇〇一年)

『森と海を結ぶ菜園家族

21世紀の未来社会論

』(小貫・伊藤、人文書院、A5判・四四八頁、二〇〇四年)

『菜園家族物語

子どもに伝える未来への夢

』(小貫・伊藤、日本経済評論社、A5判・三七二頁、二〇〇六年)

『菜園家族21

分かちあいの世界へ

』(小貫・伊藤、コモンズ、四六判・二五六頁、二〇〇八年)

ブックレット『森と湖を結ぶ菜園家族

山の学校

』(小貫・伊藤、里山研究庵Nomad、A5判・一一四頁、

二〇〇九年)

里山研究庵Nomad (主宰 小貫雅男)

〒五三二一〇三二二 滋賀県犬上郡多賀町大君ヶ畑^{おじがはた}四五二

TEL&FAX: 〇七四九一四七一・九二〇

E-mail: onuki@satoken-nomad.com

ホームページ: <http://www.satoken-nomad.com/>